



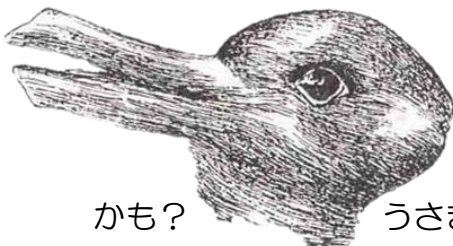
ヒライ流 ・ デジタル パーチャル 出爺多留で婆茶流な世界 シリーズ⑤

今年の年賀状は、年賀はがきに印刷したもののほか、EメールやLINEによるデジタル年賀状を試みた。パワーポイントによるアニメーションや音声を入れて動きのある表現を試みた。デジタルなヒライ流・年賀状と「ヒライ信」は下記URLからご覧下さい。

<https://1drv.ms/u/s!AiZK9Kv-HkjaqGlv8IWb33vNut-Z?e=qN1COQ>

卯年に因んでいろいろ

うさぎのだまし絵



かも? うさぎ?
うさぎかも

うさぎの影絵



兔の手足耳で作った
人の手の影絵

ウサギが出てくる歌

♪うさぎ



人の手指で作った
うさぎの影絵

うさぎうさぎ、何見て跳ねる、十五夜お月様、見て跳ねる
うっ、詐欺! 鶴鷲?、何見ては寝る、自由小屋を突き SUMMER 見ては寝る

♪うさぎとかめ



うさぎはかめを「のろい」と言いました。ウサギはカメに負けたので、
うさぎはかめを「のろい」ました。

♪ふるさと



うさぎおいしい「か」のやまの「おいしい」は・・・
うさぎ「多いし」「美味し」「老いし」「負いし」「追いし」のどれか?

♪いろは歌 (いろは48文字を一つずつ使って「卯年」を寿ぎました)

卯が跳ねる 月夜の空を ポンと蹴り 宙に舞え
うがはねる つきよのそらを ぽんとけり ちゆうにまえ
悩むも越えろ 言えぬ秘めた愛 御神籤で忘れさせ
なやむもこえろ みえぬひめたあい おみくじでわすれさせ

「卯」を構成に含む漢字 <https://kanji.jitenon.jp/kousei/list.php?data=536f> より

音読み ポウ 訓読み う		ポウ じゅんさい、かや、ぬなわ		ホウ、ヒョウ		ポウ		ポウ ミョウ		ポウ すばる	
卯		茆		茆		卯		卯		昴	
意味 う。十二支の四番目 方位では東。 時刻では午前六時 動物では兎(うさぎ)		じゅんさい。ぬなわ。 水草の一種。 すいれん科の多年草。 かや。ちがや。すすき		おおきい。 おおげさにいう。 誇張していう。 かもす。むなししい。		上海市にあった湖の名 ふち。よどみ。水の流れ がなく静かな湖。		みめよい うつくし い。		すばる。 二十八宿 の一つ。 すばるほし。	
リュウ やなぎ		リュウ ル	リュウ、 リュウ、ル	リュウ	リュウ ル	①コウ ②ロウ		リュウ、いささ(か) たよ(る)たの(しむ)			
柳		抑	廊	聊	飴	窳		聊			
やなぎ。 ヤナギ科の樹木の総称 特にしだれやなぎを指 すことが多い。		とる。 にぎる。 =捫	人名。 姓の一つ。	くりげ、 くりげう ま、黒い たてがみ を持つ赤 い馬	もち だんご	①穴倉。食料や財物を 貯蔵するための穴。 ②むなししい。うつろで 奥深い。		耳が鳴る。たよる。た のむ。たよりにする。 楽しむ。いささか。少 し。ちょっと。かりそ め。しばらく。			
リュウ	リュウ ル	ポウ	ポウ	リュウ	読み不明	ロウ	ロウ リュウ	リュウ、あまだれ したた(り)、のき			
瑯	煠	茆	筍	卸	𠂔	啣	嶠	雷			
光を発す る美しい 石	火	意味不明	意味不明	美しい 金属 良質な 金属	意味不明	大きい声	嶠嶠(ろう そう)は、 山の険しい さま	あまだれ。したたり。 したたり落ちる水。 のき。ひさし。また、雨 水をつけるとい。			
リュウ とまる	ポウ あきなう	リュウ ぼら	リュウ	リュウ ル	リュウ	リュウ ル	ポウ	リュウ			
𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔			
とまる とどまる ループル スバル	あきなう とりかえる	ぼら はげ、さ め	たけねず み。竹鼠 (ちくそ)	山のさま	屋根を支え る横木。う つばり。中 庭。	香草の名 菑美は、 薬草の名	漢代また は秦代の 県名	鳩鷓(きゅうりゅう・い いとよ)は、鳥の名。 梟(ふくろう)。 フクロウ科の鳥。			
チュウ リク、ヨク	リュウ	リュウ ル	リュウ	リュウ ル	リュウ、ル リュウ	リュウ	リュウ	読み不明		リュウ たまる ためる	
搯	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔	𠂔		𠂔	
意味不明	魚を捕ら える仕掛	意味不明	穿つ	意味不明	意味不明	ルテチウム 金メッキ 指輪、釜	意味不明	意味不明		意味不明 たまる したたる	

兎の漢字 兔の象形文字

𠂔	ノ うさぎ	ク うさぎ	刀 うさぎ	ト	読み不明	イツ 独逸	エン 冤罪	サン	メン
兔	兔	兔	兔	菟	菟	逸	冤	彘	免
甲骨文字	正字	俗字		菟系(と い)はつる 草の一種	小さな免	はしる のがれる 動き回る免	覆いをかぶ せられ外に でることが できない免	するく はしこい ウサギ	尾無し 免?

「三獣行菩薩道兔焼身語」(鎌倉時代『今昔物語集』5巻第13話より)



今は昔、天竺に兎・狐・猿、三匹の獣がいました。「私たちは生きていくときに罪深かったので、このような動物の姿にされてしまいました。これからは、他人のために良いことをします」といいました。この話を聞いた帝釈天は、老人に姿を変え、3匹の獣のもとに現れました。

「私は年老い疲れどうしようもありません。私を養ってください。私は子がなく、家がなく、食物もありません。あなたたちは深いあわれみの心を持っていると聞きました」3匹の獣はこれを聞いて、「私たちの望むところだ。すぐに養うことにしよう」といいました。

猿は木に登り、クリ・カキ・ミカン食べさせてくれました。狐は餅やご飯、様々な魚を取ってきて食べさせてくれました。老人はすっかり満腹しました。数日後、老人は言いました。「猿と狐はたいへん深い心を持っている。すでに菩薩であると言ってもいいだろう」

兎は発奮し、灯をともし香をたいて、耳を高く腰を低くして、目を見開き前足は短く、尻の穴を大きく開いて、東西南北探し歩きましたが、ついに何も得ることができませんでした。「私は老人を養うために美味しいものを持ってきます。木を拾って火を起こして待っていて下さい」猿は木を拾ってきました。狐はこれに火をつけて、兎が何か持ってくるかもしれないと待ちましたが、兎は手ぶらで帰ってきました。



猿と狐は言いました。「俺たちはおまえが何か持ってくるというので、準備して待っていた。しかし、何も無いではないか。ウソをついて木を拾わせ、火をたかせて、自分が暖まろうとしているのだ。憎らしい」

兎は言いました「私は力が及ばず、食物を持ってくることはできません。我が身を焼いて食べていただきます」そう言って、火の中に入って焼け死にました。

このとき帝釈天はもとの姿に戻り、すべての人に見せるため、火に入った兎の形を月の中に移しました。「月の中に兎がいる」といわれるのはこの兎の形です。すべての人は、月を見るごとにこの兎のことを思い出します。この説話により、勇敢なうさぎの象徴として「月」が挙げられるようになり、「うさぎ=月」のイメージが一般的となっていたのです。

